

教えてもらった話

～私たちが大切なことだと感じたこと～

VOL 10

ご自由にお持ち帰りください。



安心・快適そしてワクワク

株式会社 くるま生活

★冷めた料理★

数年前、不況で俺の勤める会社がヤバくなり、リストラされた。すぐに再就職できると思っていたが、なかなか見つからず仕方なく親戚が支配人をやっているファミレスに三ヶ月ほどバイトすることになった。

その時、たくさんの家族連れやカップルを見てきたが、子供の世話ってどの家族連れも母親がするもんなんだな。暖かい食事を持っていっても嫁さんは子供に食べさせたりして、暖かかった皿はどんどん冷めていく。逆に旦那は、子供が何をしようが、嫁さんの飯が冷めようが、お構いなしに自分の分を平らげていく。旦那が食べ終わると、子供の世話をする人もいれば、そのまま新聞なんかを読み出す人もいる。どっちにせよ、暖かい食事を食べる嫁さんというのは結構少ない。

多分、家でもこうなんだろうな。もし、俺に子供が生まれて外で食事する時は、俺も面倒みてやろう、嫁さんに暖かい食事を食べさせてやろう。そう思った。

それからしばらくして、俺は前より給料は安いものの、それなりに待遇の良い会社へ再就職した。そして子供にも恵まれた。

ファミレスに食べにいった時、子供の世話をする嫁さんとその皿を見てふと思い出した。「ああ。俺、あの時の旦那と同じことしてるな」と。

「俺が面倒みるから、お前、先に食べよ」

そういうと嫁さんは驚いた顔をした。家にいても、滅多に子供の面倒をみることもないから。

嫁さんは「悪いから・・・」といったが「いいから。ほら」と嫁の手から娘用のスプーンを取り、娘に食べさせた。嫁は小さく「ありがとう」と言い、暖かい食事を食べ始めた。嫁はいつもより早口で食事をし、俺と交替した。俺の手からスプーンを受け取る時、「ありがとう・・・本当にありがとうね」と何故か涙ぐんでいた。俺の皿には冷めた料理がのっていたが、それでも美味しく感じた。

★君の言っていることが正しいな。ボクの言っていることが間違ってた★

高校生の時は、新聞配達のほかにも、いろんなアルバイトをやった。西銀座のデパートで、窓と床とお便所をきれいにして

1日 340 円。封筒のあて名書きをやって、1日 240 円。錆付いた鉄板を磨く仕事が一番高くて1日 400 円。賄い（めし）を目当てに飲食店の出前のバイトもやった。

ある日、自転車に乗って出前をして、店に帰る途中、新宿の交差点で信号待ちしてたらさ「おまえ、何しやがんだ！」って、おじさんが顔を真っ赤にしてボクに近づいてきたんだよ。

「何って、なんなんですか？」

「なんなんですかじゃねえだろうココをってみろ！」

おじさんの車に横線が入っていたのピッカピカの新車に長いひっかき傷が1本。ボク知らないうちに、自転車の荷台に載っているアルミ箱の角かなんかで、ひっかいちゃったみたいで…

「お前が働いてる店はどこだ。店の名前を言え！」

「言わないよ。ボク」

「言わないじゃないだろ、言えよ！すぐに店に連絡しろ！」

店、店の名前って言うから、ボクは言ったんだ。

「おじさん、ボクはアルバイトなの。1日 230 円。店のオヤジさん、いい人だから、ボクのかわりに払ってくれると思うけど、小さな店だし、そんな大金払ったら、大変なことになっちゃう

よ。おカミさん、泣いちゃうよ。だから、店の名前は言えない」

「おまえのウチは？」

「ウチにお金がないから、アルバイトをしてるの。おじさん、むちゃなこと言わないでよ。ウチの親から取ろうとしてるんでしょ。親が困らないように、ボクがアルバイトしてるのに」

インチキはダメだ。絶対に逃げないぞ、とボクは思った。

「おじさん、ボクをおじさんの会社まで連れて行って、その分だけ、働かせるのが一番いい方法だと思うんだよ。どれだけでも働くから、おじさんの車のあとを、自転車で追いかけてついて行くからさ」

そしたらさ、おじさんが急に

「君の言っていることが正しいな。ボクの言っていることが間違ってた」って。

「オレもキミみたいにアルバイトして、頑張った頃があって、今、車を買えるようになったんだ。そのことを思い出した。学校を卒業したら、オレの会社においで。ごめんな…」

おじさん、涙をためて「さよなら」って、名刺を1枚残して去って行ったの。ボク、おじさんの背中を見ながら、泣いたよ。

ボロボロ泣いたよ。

ところがさ、ボク貰った名刺をなくしちゃって、いつか恩返ししようと思ってたのに、なくしちゃって、オレって、どう言う人間なんだろうかと、自分を疑っちゃったよ。それでテレビに出られるようになってから、いろんな番組でその話をして、活字でも言い続けたんだけど、おじさんからの連絡はなし。

昭和62年になって、ボクがテレビをやめようとしたときになって、やっと手紙が来たんだ。

「テレビや雑誌であなたが、私のことを言ってくれていることは知っていました。でもあなたが懸命に働いている時に、名乗り出るのはイヤでした。あなたがお休みすると聞いたので、手紙を書きました。ゆっくり休んでください」すっごいでかい会社の社長さんだった。

「ボクが間違っていた」と言える人ってカッコいい。そういうカッコいい人って、社長になっちゃうんだよね。

**『人生が楽しくなる気持ちのいい日本語』

萩本欽一著 ゴマ文庫**

★モスバーガーのおばちゃんの話★

モスバーガーってご存知ですか？ 日本でただひとつの、日本生まれのハンバーガーチェーンです。作り置きをせず、すべて注文を受けてから作ります。スタッフの人もおばちゃん、おじちゃんが多い。高校生や大学生のバイトと違って、とても自然体なんです。

ある日の夕方、いつものようにテリヤキバーガーを頬張りながら、なんとなくカウンターの方をみていると、若い女性がやってきました。

『モスバーガーください。ソースは多めで、タマネギは抜いてください』 よくある注文です。しかし、それに対する返事がよくある返事ではなかったのです。

おばちゃんアルバイトのその店員さんは、

『あんた、タマネギ嫌いなの？ 若いうちから好き嫌いはだめよ。タマネギは栄養の宝庫なのよ。あんた、まだ独身でしょ。これから結婚して子供を生んで、旦那さんの面倒見ていくのに、栄養つけなきゃだめ。ちょっと火を通しといてあげるから食べてごらん。だまされたと思って、ほんとにおいしいのよ。いいわ

ね。」

その女性、あっけにとられて、思わず

『はい。お願いします。』・・・窓際のカウンターで食べ始めた彼女の目に、涙が浮かんでいるのに気付きました。やっぱりタマネギが辛かったのでしょうか・・・

想像するに、彼女、多分東京で一人暮らしをしているのでしょう。一人だけの侘しいハンバーガー・ディナー。それが、おばちゃんアルバイトの一言で心温まる時間になった。長いこと誰からも、こんな言葉をかけてもらった事が無かったんじゃないかな。嬉しかったんだ、きっと。

帰り際のカウンターで

『ご馳走様でした。すごく美味しかった。また来ますから、タマネギお願いします！』

『いいわよ、いつでもいらっしゃい。でもハンバーガーばかり食べてちゃだめよ』

『えっ、お店の方がそんなこと言っていいんですかあ（笑）』

『あらっ、そうね。今の、店長には内緒よっ！（笑）』

帰っていく彼女の後姿、来た時よりもずっとずっと元気に見え

ました♡♡

****ザ・リッツ・カールトン・ホテル****

日本支社長 高野登 【心に届く「おもてなし」】 より

★あずさからのメッセージ★

十数年前、障がいのある子がいじめに遭い、多数の子から殴ったり蹴られたりして亡くなるという痛ましい事件が起きました。それを知った時、私は障がい児を持った親として、また一人の教員として伝えていかなくてはならないことがあると強く感じました。そして平成十四年に、担任する小学五年生の学級で初めて行ったのが「あずさからのメッセージ」という授業です。

梓は私の第三子でダウン症児として生まれました。梓が大きくなっていくまでの過程を子供たちへの質問も交えながら話していったところ、ぜひ自分たちにも見せてほしいと保護者から授業参観の要望がありました。以降、他の学級や学校などにもどんどん広まっていき、現在までに福岡市内六十校以上で出前授業や講演会をする機会をいただきました。

梓が生まれたのは平成八年のことです。私たち夫婦はもともと障がい児施設でボランティアをしていたことから、我が子がダウン症であるという現実も割に早く受け止めることができました。迷ったのは上の二人の子たちにどう知らせるかということです。

私は梓と息子、娘と四人でお風呂に入りながら「梓はダウン症で、これから先もずっと自分の名前も書けないかもしれない」と伝えました。息子は黙って梓の顔を見つめていましたが、しばらくしてこんなことを言いました。さあ、なんと言ったでしょう？という私の質問に、子供たちは

「僕が代わりに書いてあげる」

「私が教えてあげるから大丈夫」

と口々に答えます。

この問いかけによって、一人ひとりの持つ優しさがグッと引き出されるように感じます。実際に息子が言ったのは次の言葉でした。

「こんなに可愛いつちゃもん。いてくれるだけでいいやん。なんもできんでいい」。

この言葉を紹介した瞬間、子供たちの障がいに対する認識が少し変化するように思います。自分が何かをしてあげなくちゃ、と考えていたのが、いやここにいてくれるだけでいいのだと価値観が揺さぶられるのでしょう。

さて次は上の娘の話です。彼女が「将来はたくさんの子供が欲しい。もしかすると私も障がいのある子を産むかもしれないね」と言ってきたことがありました。私は「もしそうだとしたらどうする？」と尋ねました。ここで再び子供たちに質問です。さて娘はなんと答えたでしょう？

「どうしよう……私に育てられるかなあ。お母さん助けてね」。子供たちの不安はどれも深刻です。しかし当の娘が言ったのは思いも掛けない言葉でした。

「そうだとしたら面白いね。だっていろいろな子がいたほうが楽しいから」。

子供たちは一瞬「えっ？」と息を呑むような表情を見せます。そうか、障がい児って面白いんだ。いままでマイナスにばかり捉えていたものをプラスの存在として見られるようになるのです。逆に私自身が子供たちから教わることもたくさんあります。

授業の中で、梓が成長していくことに伴う「親としての喜びと不安」にはどんなものがあるかを挙げてもらうくぐりがあります。黒板を上下半分に分けて横線を引き、上半分に喜びを、下半分に不安に思われることを書き出していきます。中学生になれば勉強が分からなくなって困るのではないか。やんちゃな子たちからいじめられるのではないか……。将来に対する不安が次々と挙げられる中、こんなことを口にした子がいました。

「先生、真ん中の線はいらないんじゃない？」。

理由を尋ねると

「だって勉強が分からなくても周りの人に教えてもらい、分かるようになればそれが喜びになる。意地悪をされても、その人の優しい面に触れれば喜びに変わるから」。

これまで二つの感情を分けて考えていたことは果たしてよかったのだろうかと自分自身の教育観を大きく揺さぶられた出来事でした。

子供たちのほうでも授業を通して、それぞれに何かを感じてくれているようです。「もし将来僕に障がいのある子が生まれたら、きょうの授業を思い出してしっかり育てていきます」と言

った子。「町で障がいのある人に出会ったら自分にできることはないか考えてみたい」と言う子。「私の妹は実は障がい児学級に通っています。凄くわがままな妹で、喧嘩ばかりしていました。でもきょう家に帰ったら一緒に遊ぼうと思います」と打ち明けてくれた子。

その日の晩、ご家族の方から学校へ電話がありました。

「お母さん、なんでこの子を産んだの？」と私はいつも責められてばかりでした。でもきょう、“梓ちゃんの授業を聞いて気持ちが変わったけん、ちょっとは優しくできるかもしれんよ”と、あの子が言ってくれたんです……」。

涙ながらに話してくださるお母さんの声を聞きながら私も思わず胸がいっぱいになりました。授業の最後に、私は決まって次の自作の詩を朗読します。

「あなたの息子は あなたの娘は、あなたの子どもになりたくて生まれてきました。

生意気な僕をしっかりと叱ってくれるから

無視した私を諭してくれるから

泣いている僕を じっと待っていてくれるから

怒っている私の話を 最後まで聞いてくれるから
失敗したって 平気、平気と笑ってくれるから
そして一緒に泣いてくれるから 一緒に笑ってくれるから
おかあさん

ぼくのおかあさんになる準備をしてくれていたんだね

私のおかあさんになることがきまっていたんだね

だから、ぼくは、私は、 あなたの子どもになりたくて生まれてきました。」

上の娘から夫との馴初めを尋ねられ、お互いに学生時代、障がい児施設でボランティアをしていたからと答えたところ

「ああ、お母さんはずっと梓のお母さんになる準備をしていたんだね」

と言ってくれたことがきっかけで生まれた詩でした。

昨年より私は特別支援学級の担任となりましたが、梓を育ててくる中で得た多くの学びが、いままさにここで生かされているように思います。「お母さん、準備をしていたんだね」という娘の言葉が、より深く私の心に響いてきます。

出典元：(致知 2013年2月号 是松いづみ

(福岡市立百道浜小学校特別支援学級教諭)

最後までお読みいただきまして

ありがとうございました。

ホンの少しですが、この冊子を手にとられたすべての人が心豊かになることを祈念しております。

株式会社くるま生活は幸福創造企業です。

私たちは人が幸福になるために必要な事は二つあると考えています。

①人に存在を認められる事

②素敵な想いが実現すること事

私たちとご縁がある方は勿論のこと、ご縁の無い方も幸福になるように
仕事させていただきます。(*^^)v

〒720-0961

広島県福山市明神町 2 丁目 9-25

株式会社くるま生活

代表取締役社長 井上康一

TEL 084-943-7123

info@kurumaseikatsu.co.jp

第 10 回作成 2015 年 1 月 9 日

コピー大歓迎。何部でもお届けします。